

クライストの『ミヒャエル・コールハース』 における隣国への旅

垣本 せつ子*

2011年はドイツの古典主義・ロマン主義の時代を生きた作家ハインリッヒ・フォン・クライスト（1777-1811）の没後200年にあたり「クライスト年」の展示会と行事がドイツ内外で催された。本稿では、彼の代表作の一つである中編小説『ミヒャエル・コールハース』を取り上げ、中世から近代への社会の構造の変化を背景として旅行者の権利義務、旅の種類、そしてプロイセン（今日のブランデンブルク州とベルリンに継承）とザクセンという隣り合った地域の特殊性を論じる。

1. 中世の旅行者の権利と様々な馬

1808年に一部が雑誌に発表され、1810年に完成稿が本として出版された『ミヒャエル・コールハース』（以下、『コールハース』）はその副題（「ある年代記より」）どおり16世紀半ばに実際に起きた「ハンス・コールハーゼ」事件をもとに書かれている。史実では、ベルリンの声望ある商人コールハーゼが、ザクセン選帝侯国領¹⁾のライプチヒへ出かける途中、ザクセン領内の休憩先の居酒屋で起こしたちょっとした騒ぎが発端となった大事件である。コールハーゼが居酒屋を夜に騎馬で出発しようとしたことが農民たちに見とがめられ、馬泥棒でないことを証明するまでの間、ある騎士のところを馬を留め置かれる。コールハーゼが身分証明を取って帰ってくると今度は、その間の馬の世話にかかった費用について騎士から法外な請求が出され、おまけに馬は野良仕事に使われていたこともわかる。コールハーゼは裁判に訴えるが、思うような結論を得られない。ここまではコールハーゼに対して同情できる成り行きであるが、これから先が事件である。十分な司法による救済を与えてくれなかったザクセン国に対してコールハーゼは私闘の道を選び、盗賊となる。当時、ブランデンブルク国とザクセン国の関係が悪化していたことから、コールハーゼの乱暴狼藉をブランデンブルク国は看過する。ついにはザクセン領内に暮らしていた宗教改革者マルティン・ルターがコールハーゼ宛に和議を勧告する手紙を書くまでとなる。そして結局、広範囲の治安の悪化を懸念したブランデンブルク国の司法当局により彼は捕縛され、「1540年、復活祭前の月曜日

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

1) ザクセン、ブランデンブルクともに神聖ローマ帝国（1806年消滅）を構成し、皇帝の配下にあったが、同時に独立性が高かった。ドイツ語の表現では1871年のドイツ帝国誕生がドイツ統一であり、1990年のドイツ統一は「ドイツ再統一」と称する。ここではこの事情を鑑み、双方とも「・・国」、「・・領」と省略形でも記す。

に²⁾、車刑（極刑）に処される。

他方『コールハース』は、ナポレオンが神聖ローマ帝国を解体しベルリンに入城（1806年）してから、プロイセン（1701年にブランデンブルク選帝侯国からプロイセン王国に昇格）が劣勢を挽回するべく近代化を急ぐさなか、同国の軍人貴族であるクライストによって書かれた作品である。年代記にふさわしい記録の文体を守りながら描かれる中世らしさは、クライストの生きた当時との対照でもある。ところどころに指摘されるアナクロニズムは意図的であり、人物名や出来事の詳細は自由に創作される。こうして作品の中で中世と近代が行き来する。

中世のドイツの旅事情については『ザクセンシュピーゲル』が若干の情報を与えてくれる³⁾。『ザクセンシュピーゲル』はザクセン生まれの騎士アイケ・フォン・レプゴウ（1180? - 1233年以後）が1220年代に当初ラテン語で書かれていた法書（私人の著作・編纂による法記録）を主君の要請でドイツ語に書き改めたもので、ローマ法と並んで部分的には1900年のドイツ民法典の施行までドイツの法源として通用した⁴⁾。ドイツの農民は11世紀末から15世紀初めまで修道会と領邦君主の庇護のもと、今日のドイツ東部および東欧に入植活動を続けた。ハンブルクやベルリンなどドイツの代表的な都市が建設されたのもこの時期である。『ザクセンシュピーゲル』は中世の植民（農民）や都市建設（商人）の事情を語る資料としてたびたび引用されている⁵⁾。

クライストの『コールハース』では、ブランデンブルク領に住む馬商人のコールハースが売り物の馬を連れて、ザクセン領内に入ろうとしたところ、それまでになかった遮断棒が設置されており、手数料だけではなく、これまでには求められなかった通行証も求められる。事情がわからないまま、ザクセン国の首府ドレスデンで必要な書類を用意することを約束し、担保として2頭の馬を国境の騎士の城に預け、残りの馬と共に旅を続けるが、ドレスデンの役所へ行って、国境の遮断棒は騎士が勝手にこしらえた「でたらめ話」（“Märchen”「メルヘン」）⁶⁾とわかる。

『ザクセンシュピーゲル』は以下のように規定する。「誰しも渡橋税または渡水税を騙取した者はそれを4倍支払うべきである（……）」（第2書27・1）。「聖職者及び騎士並びに彼らの従僕は免税たるべきである。各人は、彼が車行、騎行、または歩行するにせよ、船又は橋の用を要しない場合は免税たるべきである（……）」（第2書27・2）⁷⁾。高貴な身分であれば移動に関して無税であるが、一般には川を渡るときに橋によるのであれ、船によるのであれ手数料がかかる、ただし道路上の移動は身分にかかわらず無税だという。

また、身分にかかわらず「彼は、彼の財産または生命を賭そうと欲する場合には、適法に護送税を免ぜられるべきである。誰しも、しかし彼から護送税の支払いを受けた者は、彼の護送中、彼を

2) これは『ミヒャエル・コールハース』でも同じ日付となっている。

3) Eike von Repgow: “Sachsenspiegel”, die Wolfenbütteler Bilderhandschrift, Textband, Faksimile, Forschung, hrsg. von Ruth Schmidt-Wiegand, Akademie Verlag, 1993.

4) 『ザクセンシュピーゲル・ラント法』久保正幡他訳、創文社、1977年、385頁

5) シャルル・イグネ『ドイツ植民と東欧世界の形成』宮島直機訳、彩流社、1997年

6) “Heinrich von Kleist, Sämtliche Werke und Briefe“ Bd.1, hrsg.von Helmut Sembdner, Carl Hanser, München, 1984. „Michael Kohlhaas“, S.13.

7) 『ザクセンシュピーゲル・ラント法』1977年、173頁

損害から護るべきであり、そうでなければ彼にそれ(損害)を償うべきである」(2書27・2の後半)。旅をする理由が重要である。命や財産に匹敵する重要な用件であれば、そのことが旅行者への配慮に反映されるという。旅に関しては今日の契約概念ではなく、何のための、という旅に内在する事情が決定的だった。物語のコールハースも、妻を失ってから、自分の財産を処分して騎士の不正を訴える旅に出るのである。

『ザクセンシュピーゲル』は旅の唯一の動力源だった馬の扱いについて以下のような規定をおく。即ち「いずれか通りすがりの旅人が畑の穀物をその場で飼料に用いたもののそれをどこにも持ち運ばなかったならば、その者はその価格に従って損害を償うべきである」(第2書39・2)、「騎行者に彼の馬が乗り潰されるならば、彼は路上に片足をかけながら立って(手の)届く限り、穀物を刈ってそれ(馬)に与えることができる。彼はそれ(穀物)をしかし、そこから持ち去ってはいけない」(第2書68)。旅行者自身も自分の飲食の用も満たす必要がある。しかし、それよりも旅先での馬のために条文が作られているのである。地域の住民は後で補償されるにせよ、馬の飼料を一定量、供出するよう求められた。

中世の馬のかけがえのなさは以下の条文においても見られる。「さて鳥や獣の生命金について承知されたい(……)」で始まる箇条では、「鶏、鴨・鶯鳥・牝鳥、囀鴨、仔豚、仔山羊、猫、仔羊、仔牛、仔馬、番犬、牧羊犬、猪、豚、牝豚、驢馬、騾馬、輓牛、放牧馬、耕馬、成年に達していない馬、騎馬者がそれに跨って主君に奉仕すべきもの(馬)」の賠償金額が定められる(第3書51・1)。特に馬についての規定が詳細であるが、これに続いて「しかし騎士の馬、駿馬、跑足で歩く馬および足の速い馬には生命金が定められていない。肥やした豚にもまたしかり。それゆえ人はそれら及びすべての動産を返還するか、またはそれらを失った者の評価に従って賠償すべきである(……)」(第3書51・2)とあり、金銭で賠償できない場合を想定している。

中世は身分社会であるから当然、旅も身分により条件は異なったが、それ以外に旅行の事情や重要度が考慮される。このことは『コールハース』の中段で、お尋ね者となったにもかかわらずコールハースがルターの仲介によって「自由通行権」(freies Geleit)⁸⁾という「恩赦」(Amnestie)⁹⁾を得る場面に現れている。ここでは罪の動機だけではなく、ブランデンブルク国出身の彼がザクセン国では「外国人」¹⁰⁾だったことが考慮されている。

『ザクセンシュピーゲル』における動物の細かい規定は、啓蒙主義以降の「人」と「それ以外の動物」という区分とは対照的である。『コールハース』も史実のコールハーゼ事件も騒動の発端は馬の扱いである。動力を動物に頼る時代は、近代の交通革命で終わるが、それは宗教観の変遷を伴った。

8) Kleist: a.a.O., S.46.

9) a.a.O., S.49.

10) a.a.O.

2. 『ミヒャエル・コールハース』における旅のリアリティー

『コールハース』に描かれる旅は躍動的であり旅人の生理的な感覚に溢れている。クライストの生きた時代の時間がそこには流れている。作品の人名が、改名されるか、創作されているのに対して、地名は都市だけではなく近郊も含めて実在のものが使われている。それらは、雑誌に発表された初校では伏せられていたのに、後の出版で明記されたものである。クライストは1800年にザクセンを旅行し、1807年から2年間、ドレスデンに滞在している。このような経験が隣り合う2つの地域の比較を可能にした。

(1) 天気

小説の冒頭、コールハースがエルベ川沿いにザクセン領へ入っていったのは嵐模様の雨が降りしきる中だった。川沿いの城の近くに、これまでにはなかった遮断棒が下がっているために、彼は城の番人を呼び出す。雨の中、屋外へ呼び出された税官吏は不機嫌である。コールハースは風にはためく外套を持って余しながら通行料のグロッシェン銅貨を取り出す。税官吏が遮断棒を上げている間、これを塔の中から見ている城代家老が、風除けに羽織った半纏の前を留めながら飛び出してくる。家老は、斜の姿勢を取って風を避けながら、コールハースに馬を輸送するための通行証を提出するよう迫る。3人とも悪天候の中、職務のためにだけこの場にいるのであり、まともな対話は生まれない。コールハースはこれまで聞いたこともなかった通行証について尋ねるために城へ上がり、領主の騎士、フォン・トロンカを訪ねる。そちらでは仲間の騎士と宴もたけなわ、突然の来訪者に一同は白けるが、「馬」と聞いて俄然、にぎやかになる。ちょうど雨が上がる時間帯と重なったこともあり、皆、コールハースの馬が待機している中庭へと降りていく。そこで馬の売買の話がひとしきり持ち上がるが、結局まとまらない。しかも、通行証については一向、埒が明かないまま、再び雨がふり返ってくる。騎士フォン・トロンカは城代家老に委細を委ねて、早くも切り上げようとする。コールハースが保証金を払って、ザクセン領で通行証を取ってくるまでの間、猶予してもらおうとするのに対して、城代家老は馬そのものを担保として残すように要求する。震えながら半纏の前をかき合わせていた、騎士は、往来に開かれた門から一陣の風が送った雨とあられをまともに浴びて、もはやこれまでと城に戻る。コールハースは交渉を断念し、言われたとおりに2頭の黒馬と、その世話役に下男頭のヒルゼを城に残して、残りの馬と共にライプチヒの見本市への旅路を急ぐ。ライプチヒで見本市が開かれるのは年に3回、新年と復活祭とミヒャエル祭（9月29日）である。冬を思わせる厳しい天気と夏の余韻を残す屋内の宴会気分の交錯、冒頭の場面は秋の見本市の季節であろうと想像される。そして、後にそれが確かめられる。

天気は作品の前半を決する重要な要素である。体が天気に生理的に反応し、人の気持ちと行動はその体に反応する。冒頭では単なる偶然に過ぎなかった天気は、その後繰り返し記述され、コールハースの行路を支配するようになる。裁判の道を絶たれたコールハースがたった7人の手勢で、騎士の城を襲う夜は、乾燥した空気で、投げ入れた火種が直ちに城内の掘立小屋から周囲に移り、ぱちぱちと炎上する。これを端緒に、コールハースは、逃げる騎士の行方を追って、配下を増やしながらかザクセン領の町々に焼打ちをかけることとなる。しかしその結果は様々で、たとえば、「大天

使ミヒヤエルの代官として」¹¹⁾ 天誅を下すかのようなお触れ文を散布したライプチヒでは、降り続く雨のために空振りとなり、被害はほとんどなかった。神がかりになったコールハースをあざ笑うかのように、天候が運命となる。そしてこの状態は、ザクセン領内ヴィッテンベルクの住人だったマルティン・ルターがコールハースを弾劾する文書を公示し、コールハースが彼の家を訪ねる場面まで続く。

(2) 川の風景

ブランデンブルク国とザクセン国の境にはエルベ川が流れている（図1）。一方、小説の始まりは「ハーヴェル川の岸辺に16世紀の半ばごろ、ミヒヤエル・コールハースという名の馬商人が住んでいた、…」¹²⁾ とあり、ハーヴェル川はエルベ川の支流である。この小説全体に川が巡り交差する。そして川は交通のためだけに流れているのではなく、何かを断念するためにモノを投げ込む場所であり、また全く正反対に川べりを散歩して人に心を開く場所でもある。『コールハース』では前者は、虐待された拳銃、騎士の城を追い出された下男頭のヒルゼが、子供の泣き声を聞いたため城の火付けを断念して硫黄糸をエルベ川へ投げる場面であり、後者はコールハース裁判の最後の展開のきっかけとなったブランデンブルク選帝侯のシュプレー川沿いの散歩の場面である。

コールハースらに襲撃されて城を逃げ出した騎士は城の裏口に接岸していた、舵もオールもない小舟に乗り込みエルベ川下の近隣の村に逃げ込む。そして村の船を借り受けて今度は川を遡り、デッサウでエルベ川に注ぐムルデ川をさらに上り、彼の叔母が尼僧院長を務めるエルラブルン修道院¹³⁾へ逃げ込むのだが、コールハースがその居場所の見当をつけるのは襲撃の翌日の昼ごろであ

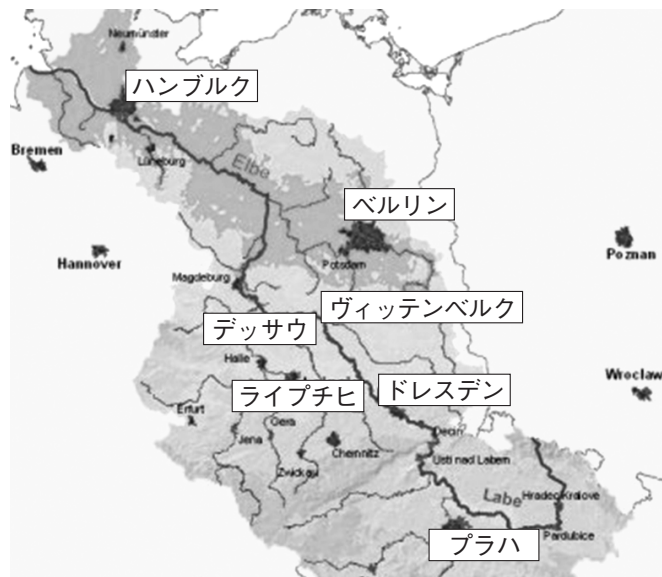


図1 「エルベ川の流れ」 (http://www.usf.uos.de/projects/elbe_dss/) に日本語表記で周辺の都市とベルリンの所在地を記した。

11) Kleist: S.41.

12) a.a.O., S.9,

13) この名前はクライストの創作である。

った。一同は出発の3時間後には同所に到着するが、尼僧院長は、騎士を引き渡すようにというコールハースの要求書はたった今受け取ったばかりであり、騎士は既に2時間前にヴィッテンベルクに向けて出発したと言う。コールハースが先遣の使者として送り込んでいた下男も、たしかにムルデ川の増水で要求書の伝達が遅れたと、この言葉を裏付ける。コールハースは絶望のあまり、ここでも火を付けようとするが、前夜とは違う落雷を伴う天候の急変にたじろいで何の手出しもできない。

ムルデ川の実際の情景はクライストが1800年の旅の途中、婚約者に送った手紙の中で描かれている。急峻な崖と溪谷の間に切り込まれた道を夜に馱馬車で行き、その心細さ、岩場のそれぞれが妖怪のようであったこと、点在する家々がそれでも灯りをともして生活が営まれているのが、おとぎの国の出来事のように思われたことが書かれている¹⁴⁾。

これに対してエルベ川は交通と都市の川である。ルターに住むヴィッテンベルクも、小説後半の舞台となるザクセンの首府ドレスデンもエルベ川に面している。川はこれを挟む両岸の地区・地域に対照的な性格を与え、それでいながら相互補完的な一体感も生み出す。レッシングの喜劇『ミンナ・フォン・バルンヘルム』(1767年初演)¹⁵⁾の中ではプロイセン軍人とザクセン貴族の娘の恋愛を通して、ザクセンとプロイセンの和解も可能であるように描かれている。

『ミヒャエル・コールハース』にはしかし、川の別の側面も描かれている。コールハースはザクセン領内で万事休すとなった時にハンブルクへ脱出することを思いつく。ハンブルクに出ればドイツを脱出して中近東か東インドへ行かれるだろう。長らくドイツから海外への玄関口だったハンブルクはエルベ川の河口近くに位置し、ザクセンの首府ドレスデンの川下にあたる¹⁶⁾。交通路である川は産業に直結し、それを利用する人々の新しい行動を生み出した。隣り合った地域でも川へのアクセスの相違が地域の性格を全く変え、両国の関係を相互補完ではなく、すれ違いの関係とする。

(3) 旅行者の保護と旅行者の義務

小説の冒頭に戻る。騎士の城で新たに設置された遮断棒を税官吏は「領邦君主による特権(Privilegium)」¹⁷⁾と説明する。中世においては「正義」であり「裁判などのしかるべき法的手続き」という意味でも使われた“Recht”という語は、近代の民主主義において、身分に関係なくすべての人に等しく賦与される「権利」という意味を獲得する¹⁸⁾。中世でそれに代わるものといえば、人や事業の本質に合わせて与えられる「特権」であり、今日の否定的な意味は持っていない。

先代の城主は既に亡くなったと聞いたコールハースはその徳を思い出す。「通商を助けて」、「にぎやかな往来を喜ぶ人だった」、「自分(コールハース)の馬の一頭が先年、足を怪我したとき、城

¹⁴⁾ Kleist: S.538. 1800年9月3日早朝5時、婚約者宛、ドレスデンより。

¹⁵⁾ Gotthold Ephraim Lessing: “Werke”, Erster Band, Carl Hanser Verlag, 1970, S.660.ff.

¹⁶⁾ もっともハンブルクがアムステルダムに代わって海外渡航の人々や製品の玄関口となるのは18世紀後半とされるので、このコールハースの発想も18世紀的である。

¹⁷⁾ Kleist, a.a.O., S. 9.

¹⁸⁾ K. クレッシュェル『ゲルマン法の虚像と実像—ドイツ法史の新しい道』「12世紀における法と法概念」石川武監訳、創文社、1989年、43頁以下。

¹⁹⁾ Kleist, a.a.O., S.10.

外の村の入り口に石堤（Steindamm）を築いてくれた」¹⁹⁾と。エルベ川の東部流域は今日でも大洪水に見舞われ、治水が成功しているとはいえない。その難しい川周辺の道路補修を、城外で本来は管轄外であるにもかかわらず先代の城主は請け負ってくれたというのである。コールハースは、悪天候を呪い手数料の小銭を早く払うようにせかす税官吏に、「この木（遮断棒）は森に残っていたほうが、お前さんとわたしにはよかったろうに」と声をかける。さらには今回の措置は、ザクセン国で始まったばかりの馬匹の飼育産業を保護するために出された新たな政令だろうかと現実の政情を思ってもみる。新たな遮断棒の存在は、国々が近代化に向けて国境の管理のために自然を破壊することや、隣り合った地域として協同する代わりに、競争的な産業政策を導入したことを示唆している。

コールハースはドレスデンで、この川沿いの関所が騎士の「でたらめ話」だという証明書類を作ってもらい安心して、ライプチヒでの馬の商いも終えて数週間後に城に戻る。そしてそこで、やせさらばえ、たてがみを始め毛という毛が泥でこね合わされたように固まった馬2頭と再会する²⁰⁾。城の側は証明書の話にもはや取り合わず、早く連れて帰れというばかりであり、怒り心頭のコールハースはそのままドレスデンに引き返して訴え出ようと城を飛び出していく。ところが、城側の話の中でどうしても解明できないことがあった。コールハースは城側に負担をかけないように、下男頭ヒルゼに費用を預けて馬の世話を託していたのだが、この男は不行跡が原因ですぐに城を放逐されたという。まずはこちらの落ち度がどの程度のものか確かめるためにコールハースはブランデンブルク領への道を引き返して帰郷、ヒルゼに客としてどのように振る舞ったか尋ねる。「あれらの馬は既に昨春から馬具を付けて引かせたことがあったし、収穫の忙しい時期に一度か数度、農作業をさせてもよかった」²¹⁾のだが。これに対してヒルゼは、それは承知で、ただ「滞在3日目の午前、馬は車3台分の荷を引いたのです」²²⁾、と答える。この答に衝撃を受けてコールハースは視線を下に落とす。さらには城側からは飼料の負担は城側が持つのでヒルゼは預かった金を手中に収めればよいと提案され、ヒルゼはこれを断ったことや、この拒絶の後、馬はすぐに騎士の客の馬に譲るために厩を出され、窮屈な豚小屋に押し込められたため、屋根を時々はずして首を伸ばせるようにしてやったこと、下男頭が城を追い出されたのは、豚小屋で汚れた馬の体を洗うために城外の水浴び場に連れ出そうとしたのが逃亡と疑われたからだと聞くに及ぶ。ここまでのコールハースの行動は冷静であり、旅行者も客としての義務を負うものとしている。しかし妻からも、最近、騎士の城の一味が旅行者に無法な要求をすることで評判になっていること、ヒルゼの代わりの下男を、馬を受け取りに城にやろうとしたが、その者の身に何が起こるかわからないからむしろ馬をあきらめた方がよいと判断したことなどを聞いて、私憤をはらすよりは、他の旅行者のために公民として裁判に訴えようと決心する。妻も裁判費用の支出に賛同する。馬の原状復帰と返還だけではなく、ヒルゼが城を追い出されたときに置いてきた持ち物やヒルゼの治療にかかった経費は損害賠償として請求することにする。

²⁰⁾ コールハースの職業は”Roßkamm”と説明されるがこれは馬商人の蔑称である。Kammとは櫛を意味して、馬商人は馬のたてがみを十分に梳って商品価値を高めたからだと言われる。

²¹⁾ S.17.

²²⁾ aa.O.

けれども訴訟は遅々として進まない。コールハースはドレスデンに赴きその手続きだけで数週間滞在した後、帰郷するが数か月たっても返事がなくやっと年の瀬に却下の返事を受け取る。門前払いの理由は騎士の従兄弟であるヒンツとクンツ²³⁾がそれぞれ宮廷の要職に付いていることではないかと代訴人から知らされる。ブランデンブルク国での訴えも思うように進まない。好意あるブランデンブルク市の部隊長の仲介のいかにもなく、こちらの宮廷もその宰相が問題の騎士と姻戚関係にあり再び門前払い、さらには訴人コールハースを激しく責める返事が返ってくる。その間、騎士側からは何の音沙汰もなく、城を通りかかったという旅行者から馬は相変わらず野良作業に酷使されていると知らされる。ここで、家作を売り払ってさらに訴訟活動を進めようとするコールハースをなだめるために妻が自分でベルリンのお城に行き、ブランデンブルク選帝侯に直訴することを提案する。何といても女性のほうが偉い人に近づきやすい、城勤めの中には昔、自分に惚れてくれた人がいて今でも便宜を図ってくれるだろうからというのである。ところがあることか、その妻までが、昔の知り合いに会えず、おそらくは無謀に選帝侯に近づきすぎたのであろう（とされる）、職務熱心な護衛に槍の柄で一突きされ瀕死の状態に戻り、ほどなく亡くなる。そして妻の届けた請願書に対しては、もはや公務を煩わす犯罪者扱いの返事が葬式の日に届く。

コールハースはついに騎士の城に3日の期限を付けて、騎士が馬と一緒にこちらへ来て、騎士自身の世話で馬を元の状態に戻すよう請求書を直接送りつける。そしてこれも無視されることを見越して3日目の夜、わずか7人の配下で城に乗り込む。訴訟に関わっていたときには数週間、数か月とあいまだった時間の流れが、ここからは3日、3時間、と正確に計られていく。ただし求めるものは公民としての義務と私的な利益の間のバランスを保つことではなく、社会の不正を正すという壮大なものとなった。

(4) 恩赦の旅、護送の旅、愛の旅

盗賊の首領となったコールハースの移動はもはや一般人の旅ではない。けれども時代背景のある様々な旅がこの後に展開していく。

コールハースがザクセン領を荒らし、騎士の行方を追う一方、騎士の悪評は周辺に知れ渡り、騎士が逃げ込んだ町の住民は騎士に対して少しも同情の気持ちを持っていない。そのこともあり、ついには侯国の軍が出動する騒ぎになってもコールハースは巧みに作戦を練って逃げ回り、配下の数を増やしていく。いわば義賊として名を馳せていくのである。ここでマルティン・ルターが動き、弾劾の手紙を公示する²⁴⁾。ルターはコールハースを「人間の秩序の堤 (Damm)」²⁵⁾へ戻そうと試みる。ここにも川が比喩がとなって現れ、コールハースの激情の暴れ川を、ルターの理性の言葉が堤となって正常な流れに戻そうとする。訪れてきたコールハースに、ルターはザクセン選帝侯に取り計らって、裁判のためにドレスデンへ赴く「自由通行権」が恩赦として得られるようにしてやる

²³⁾ ヒンツとクンツは並べて使われると「任意の誰かれ」という意味だと解説される。およそ貴族らしくない命名である。『クライスト全集』第一巻、佐藤恵三訳、沖積舎、367頁。

²⁴⁾ これは史実どおりであるが、手紙の内容はクライストの創作である。

²⁵⁾ Kleist, a.a.O., S.42.

うと言う。もともとザクセンで「外国人」であるコールハースには、国内の臣下が反逆した時とは違う取扱いがなされてしかるべきであろうという考えも示される。そして何よりもコールハースの所業は神による赦しを得られるものではないが、発端の係争事件は人間の作った法律によって解決されるべきものだからという。この提案を受け入れてコールハースは一味を解散、その財産をすべて処分し、身一つとなり護衛に付き添われてドレスデンに上京する。そして再び市民生活に戻ることを願って、シュベリン侯国の妻の実家に預けておいた5人の子供たちを呼び戻すこと、護衛はコールハースを守る意味で専属の者をつけ、あくまでも外出は自由であることなどをザクセン政府と取り決める。問題の騎士の従兄弟たちが侍従長や献酌侍従というザクセンで高位の宮廷人だったことが、コールハースの挫折の原因となっていたが、どの宮廷にも意見の違いがあり、コールハースに同情的な宮廷人が出現して事態は好転する。一方、問題の騎士の一族は裁判までの特別な措置として恩赦を受け入れざるをえない。

ところがこのせっかくの取り計らいも、うまくいかない。コールハースが求めたのは元通りに元気になった馬の返却であったが、まずその馬の行方を誰も知らなかったからである。騎士の城の襲撃の後に生き残った者の証言では馬はたしかにコールハースの命令で当時、小屋から引き出されてきたが、騎士の行方を追う喧噪のなかで城外に連れ出されてしまったという。そして恐らくはそのまま行方不明で終わるだろうと騎士とその従兄弟たちは望むが、それを確認するために探索のかかった村に出したお触れに答える形で実際に2頭の馬がドレスデンの広場に引かれてくる。問題はその瀕死の2頭は転売の末にデベルン²⁶⁾まで移動して、そこで皮剥ぎ屋に引き取られたという。変わり果てたこれらの馬をコールハースはたしかに自分の馬だと認める。このことは騎士ばかりではなく「名誉ある」(ehrllich)²⁷⁾コールハースにとっても不幸なことだったとされる。

ここでいう「名誉」(Ehre)とは今日、個人の功績に対して外部から与えられる名誉ではなく、ドイツ中世の社会で首切り役人などの差別された身分には属していない、という意味である²⁸⁾。瀕死の馬がいったん皮剥ぎ屋の手に渡ったならばもはや「名誉ある」状態ではないので、クンツ侍従長に命令されても下僕は扱いを拒否する。背後には、下僕を唆すヒンボルト親方(Meister Himboldt)らがついて、このことからクンツ侍従長と民衆の間に口論が発生、広場内での暴動に発展して、侍従長はすんでのところを、たまたま通りかかった騎馬隊によって救助される。ヒンボルト親方は、わずか1シーンの登場でも名前がつけられているほど中世を象徴する人物として重要視されている²⁹⁾。それはいうまでもなく近代の教養市民ではなく、中世の閉じられたツンフト制度下に暮らす手工業者らの代表である。ここで再び馬をめぐる、対立の軸が鮮明になった。広場で2頭のよぼよぼの馬のために嘲笑された騎士とその一族はますますコールハースを憎み、他方、コールハースの「味方」となった宮廷人はコールハースの請求の一字一句にこだわり、金銭による解決という妥協案を練ることができない。武器を捨てたコールハースはもはや騒擾を望んでおらず早期

²⁶⁾ ムルデ川沿い、マイセン近郊にある。

²⁷⁾ Kleist, a.a.O., S.58.

²⁸⁾ 阿部謹也 『阿部謹也著作集』 2、「刑事の社会史」筑摩書房、1999年、の中の「皮剥ぎの差別と特権」の章に詳述される。

²⁹⁾ 『チリの地震』のペドリロ親方も同様である。S.158.

の解決を望んでいたのであるが、ルターの仲介もむなしく再び対立者は離れ離れになる。

コールハースにとって致命的だったのは、かつての残党がコールハースの名を騙って、ボヘミアとの国境にあるエルツ山脈で活動を盛んにするようになったことである。「恩赦」はまちがいだったのではないか、さらにはもともと騎士が国境の城でコールハースに身分証明を求めたのも、12年前にブランデンブルク領で家畜の伝染病が流行したときにザクセン選帝侯が禁輸の布告を出したことがあり、まちがってはいなかったのではないかと、宮廷では騎士側の議論が勢いを増す。自由に外出できるはずだったコールハースは軟禁状態に置かれる。さらにドイツ脱出を夢見て、昔の一味からの手紙に答えたことが咎められ、ついに逮捕、「皮剥ぎ屋の下男」による遺体処理を含む極刑が言い渡される³⁰⁾。

ところがここで、ブランデンブルク国が介入してくる。コールハースに親身になってくれたものの力及ばなかったブランデンブルク市の部隊長が、選帝侯のシュプレー川岸（ベルリン）での散歩に同行して、直接、コールハースの件を訴える。そしてブランデンブルク国とザクセン国の力関係も影響して、コールハースはブランデンブルク国に引き取られて改めて裁判を受けることとなる。ザクセン国はウィーンの皇帝に訴え、選帝侯国の代理人として帝国法律顧問官をベルリンに派遣してもらおうよう依頼する。ザクセン国での恩赦の効力は帝国には及ばず、ブランデンブルク国でザクセンの代理を務められるのは帝国だけだからである。こうしてコールハースは故郷への護送の旅に出発する。

そしてこの旅とは全く異質な、けれども当時においては一つの典型的な旅がここに重なる。お狩場への旅であり、クライストの生きた時代のザクセン宮廷にふさわしい愛の旅である。武骨なプロイセンに対して、華やかなザクセンが謳われたのは、アウグスト強王（1670-1733）の女性関係にまつわる伝説やイタリア・ルネサンスの芸術品収集があったからである。強王はザクセン選帝侯の他にポーランド王を兼ねていたため「王」と呼ばれ、マイセンでヨーロッパ初の磁器制作に成功、巨額の富を手中にする³¹⁾。庶子が450人いたとされる。今日でもマイセン磁器で作られた食卓飾りの置物の多くは狩りや男女の戯れをテーマとしている。強王のお狩場への旅は、女性に近づく機会でもあった³²⁾。

コールハースがブランデンブルクの官憲に引き取られると、護送の日程の詳細はもはやザクセン側が深く関知しないこととなる。その間にザクセン侯も近隣の領主に招待され狩りの旅に出かける。その目的地はDahme（ダーメ）という実在の町（現在はブランデンブルク州）であるが、ここはDame（淑女）との語呂合わせでもあろう。選帝侯は侍従長のクンツ、その妻エロイーズら宮廷の主だったメンバーを引き連れ宿営の陣を取りながら狩猟の旅を続ける。幕屋は旗で飾られ、小姓たちは櫛の太い枝に乗って音楽を奏で、一行は会食を楽しんでいる。そこへコールハースを護送する一行が通りかかる。コールハースがドレスデンへ呼び寄せた子供の具合が悪くなったため前の宿

³⁰⁾ a.a.O., S.77.

³¹⁾ ライプチヒで活躍した作曲家バッハの領邦君主でもあった。

³²⁾ Carl Ludwig von Pöllnitz : „Das galante Sachsen“, 1734, In : dtv klassik, 1995, Deutscher Taschenbuchverlag, München, S.75.

泊地で長く滞在したことが予定変更の原因で、こうして明と暗の旅は思いがけず鉢合わせることとなる。そのような事情を知らない選帝侯は、狩猟用の旅装をしている気軽さもあり、見知らぬ囚人を訪ねようと言い出し、エロイーズがお土産用にテーブルの上のパンやケーキや果物を小姓の差し出す銀の鉢に盛っていく。そこへ招待主があわててやって来て、囚人はコールハースであると告げる。一行に衝撃が走り、訪問はいったん取りやめになる。夜になり招待主は宴をさらに盛り上げるために、「鹿はまだ周辺におり」³³⁾、待ち伏せ堤に行ってみればよいだろうと提案する。そこで一同は喜んで「対になって」夜の森へ入っていく。選帝侯とその初恋の相手だったというエロイーズは招待主の使者に周辺を案内してもらいながら、コールハースの泊まっている庄屋の館にも通りかかる。そしてコールハースは何も知らないという説明を受け、積極的なエロイーズに追随する形で選帝侯も、中へ入ってしまう。

エロイーズといえば、中世の愛の書簡で有名な『アベラールとエロイーズ』のエロイーズであろう。華麗で、しかも陰謀が渦巻く宮廷の恋愛と対照的に、護送の囚人を見舞う精神的な愛である。護送の囚人を見舞うのは当時、一般的でもあった。ベルリンで活躍した画家ホドヴィエツキー(1726-1801年)は1758年9月25日、7年戦争でロシア人捕虜たちが移送される途中、ベルリンを通過した場面を銅版画に残している(図2)。この銅版画は31年後、『7年戦争史』(1789年)に収められ、ロシアの捕虜たちが町の夫人たちから施しを受け、高齢の者、体が弱っている者には特にベルリンの王宮からお茶などの温かい飲み物が振る舞われた場面であるという。絵の右端に立つ画家の夫人は護衛の兵隊にチップを渡している。



図2 「ロシアの捕虜」、Daniel Nikolaus Chodowiecki :
“Das druckgraphische Werk”, Kunstbuchverlag Galerie
J.H.Bauer, Hannover, 1982. Ba. (図版番号) 14 より転載。

軍人貴族の家に生まれたクライストは14歳でポツダムの連隊に入隊、大学進学を理由に22歳で除隊するまでは軍人であり、フランス革命軍を相手の行軍も経験している。その後、大学も中退し

³³⁾ S.81. 次の文の引用も同様。

1804年には宮廷への請願が聞き届けられ文官として公務に復帰、プロイセン改革の中核にいたフォン・シュタイン男爵を上司として今度こそ生活が安定するかに見えたが、官僚生活も合わなかったようで1806年には休職を申し出る。1807年に、フランス軍占領下のベルリンに無謀にも戻りスパイとして逮捕され、ジュラ山脈ポンタルリエ近くの要塞まで移送され、4か月間、拘留生活を送る。彼は護送の旅を経験していたのである。このとき彼のために、待遇や解放の条件について当局と互角に渡り合ったのは義姉ウルリケだった。そして晩年のクライストを支えたのは、彼の姻戚で宮廷では王妃の侍女を務めたマリー・フォン・クライスト（1761-1831年）やマリーを通じて手当を支給しつづけた王妃ルイーゼ（1776-1810年）などの女性たちであった。出版や著述業では生活の安定しなかったクライストにとって1810年の王妃の死は生活の道を絶たれたに等しく、その翌年、34歳で、知り合って日の浅い人妻とヴァンゼー湖（ベルリン）で心中してしまう。宮廷で働く行動的な女性は、彼の保守的な女性観が何であれ、近くに存在した。従って作中のエロイーズのように女性が澁刺と取り仕切る旅行の自由な雰囲気も当時において、十分、現実的だったであろう。

3. 「神聖」を呑む — 『ミヒャエル・コールハース』の結末—

これらの旅に一定のリアリティーがある一方、物語の最後は、一気に非現実的な展開となる。その発端は、ザクセン侯が護送中のコールハースを見舞ったときに、彼がお守りのように首にぶら下げている小箱（Kapsel）に目を留めたことである。侯がその由来を尋ねたところ、7か月前にまだ問題の騎士の行方を追っているときに立ち寄った市場でジブシーの老婆からもらったのだという。実はこのカプセルには、選帝侯が同じ老婆に冗談に尋ねた侯国の行く末についての返事が入っていることが、コールハースの語る状況からわかってくる。老婆は答を紙に書き付け小箱に入れるが、選帝侯に渡さずに、雑踏の中からコールハースを選んでお守りとして渡していたのだ。コールハースは小箱のいわれもましてやその中身も知らない。選帝侯は小箱をどうしても手に入れたくなるが、もはやブランデンブルク国に引き渡されたコールハースに直接、手出しすることはできない。コールハースがブランデンブルク領に入った後に配下を送って奸計で手に入れようとするが失敗する。コールハースに命綱を握られた思いのザクセン侯は、たびたび卒倒して病に伏せる。

ついにブランデンブルクではコールハースに、斬首による死刑判決が出され、ザクセン側でも問題の騎士に2年の牢獄行きの実刑判決が出る。ベルリンの処刑台にはブランデンブルク選帝侯やウイーンから派遣された帝国法律顧問官が参集し、コールハースの前で、死刑判決の前提となる損害賠償が解決済みであるか確かめられる。下男ヒルゼが騎士の城に置いてきた所持品と治療にかかった費用の賠償金は、ヒルゼは既に亡くなっていたので、その母に渡される。そして馬。2頭の馬は、ザクセン国で旗を振って浄められ、再び「名誉ある」³⁴⁾状態になって、騎士の一族に世話され元気になる（!）。名誉回復のために旗を振る儀式は、宗教儀式だけではなく、領邦君主の名において軍隊でも行われていたことを、クライストは行軍で見聞していただろうと推測されて

³⁴⁾ S.101.

いる³⁵⁾。コールハースは馬を二人の息子に与える。ブランデンブルク選帝侯の「これで満足か」³⁶⁾という問いに対して、コールハースは「この地上における最高の望みはかないました」³⁷⁾と答える。

けれどももう一つ、彼が望んでいることがあった。群衆の中にお忍び姿のザクセン選帝侯がいて、死刑執行後すかさず小箱を奪い取ろうと待ち構えていた。そのことをコールハースは、死刑執行前に再び現れたジプシーの老婆（亡くなった妻の再来だとわかる）から、小箱の意味と共に聞き及んでいた。コールハースは群衆に紛れこんでいた選帝侯の前に行き、小箱を開き、答の紙を取り出し、封印を破り一瞥後、呑み込む。選帝侯は卒倒し周囲が騒然とする中、コールハースは断頭台に向かい、直ちに首が刎ねられる。斬首刑であれば遺体の損傷は許されない。謎は明かされずに葬られたのである。その後のザクセン国について、今「私たちは（コールハースの）後を追って読んでいます」³⁸⁾、と小説は終わる。当初、公益と家族の双方に配慮する近代市民の模範だったコールハースは、社会の不正に立ち向かう無法者となり、最後は、恩赦を破棄したザクセン選帝侯への復讐をとげて亡くなる。

『コールハース』の結末は、裁判による法と正義が実現しながら、同時に復讐の完成ともなった。法の裁きにより成果を挙げた満足感よりも、怨念をはらすことで主人公は安んじて死を迎える。その法的な結末もクライストの時代状況に照らしてみれば皮肉である。コールハースの息子たちはコールハースの死後、選帝侯によって騎士に叙されるが、クライストの時代は、神聖ローマ帝国がライン川西側の領土をフランスに割譲、かつて300余りに分かれていた領邦が40に減り、帝国都市・聖界諸侯領のほとんどと帝国騎士領のすべてが消滅するという大編成の時代だった。ザクセン侯の恐れた占いは、神聖ローマ帝国消滅により現実となる。

(1) 啓蒙と反啓蒙の対立と旅の変容

中世は人間の種類を聖性への関わりから分類する。その中世の思想を代表するのがザクセン宮廷である。ルターの忠告を受け入れコールハースに恩赦を与えるかを議論している中で、恩赦に反対した侍従長のクンツは、そのような恩赦は「選帝侯の聖化された (geheiligte) ご位階 (Person)」³⁹⁾にとって恥辱に他ならないと述べる。ここでいうPersonは通常「人物」、「人」と訳されるが、「三位一体」(神・聖霊・子)というときの「位」もPersonで表され、ここではそちらの霊的な意味に解してよいであろう。神聖ローマ帝国の皇帝が神聖ならば、これを選ぶ選帝侯たち(当初は7人)も同様の霊の「位」に連なる。ジプシーの老婆は侯国の行く末として「宗家の最後の当事者の名前」、「統治の喪失の年度」、「誰が喪失をもたらすか」を占ったという。その問いが市場を出回り、「名誉喪失の極刑を言い渡した男のもとに留まっていることにザクセン侯は震撼する。ザクセン国は「名誉ある」状態かどうかで暴動が始まるような前近代的な世界に生きている。

これに対してクライストの描くブランデンブルク国には、1701年にプロイセン王国が成立して以

³⁵⁾ Günter Hagedorn: "Erläuterungen und Dokumente: Heinrich von Kleist, Michael Kohlhaas", Reclam, 1970, S.46

³⁶⁾ S.102.

³⁷⁾ a.a.O.

³⁸⁾ a.a.O., S.103.

³⁹⁾ S.50.

来の啓蒙主義が反映されている。物語の前半に、コールハースが騎士の家臣に暴行された下男頭ヒルゼをブランデンブルク市の湯治場に治療のために連れて行って、そこで親切な部隊長に出会い、裁判についての次なる希望（そして失望）を与えられる場面があるが、その湯治場は部隊長が町に交付された予算の中から「病人と貧しい者」のために作った多くの施設の一つだった。啓蒙主義は宗教の狂信と戦うことを旗印として、社会の世俗化を進める思想である。ブランデンブルク市では、宗教界ではなく行政機関が社会福祉を手掛けることが啓蒙の成果だった。クライストがプロイセンで一時、籍を置いたのも、啓蒙主義による近代化を迫られた官僚の世界である。フランス革命は啓蒙主義の実現であり、ナポレオンの登場はその完成として喝采された。実現はしなかったものの、クライストはライプチヒで『ナポレオン法典』（フランス民法典）を出版する会社設立を試みている⁴⁰⁾。そのような流れの中では、1806年にナポレオンが神聖ローマ帝国を解体したことは、たしかに「啓蒙」が「神聖」を呑みこむ現象であった。

コールハースとナポレオンは表面上は正反対である。コールハースは小説の冒頭で「当代において最も公正で、最も恐ろしい人間」⁴¹⁾ だったと紹介される。史実のコールハーゼのファーストネームはハンスであるが、クライストの創作したコールハースのミヒャエル (Michael) というファーストネームは、周囲と折り合って生きることを良とする「ミッヒェル (Michel)」(ドイツ人全般を意味する「愚直な善人」)⁴²⁾ と、戦う大天使ミヒャエル (Michael) の意味を含んでの命名だという。しかし結局は、この世の人間として当然の処罰を受けて亡くなる。他方、ナポレオンは「天才」である。

近代化とは能力試験導入という公の人事における抜本的な改革でもある⁴³⁾。宮廷の陪臣から国家官僚への変容である。一方で、天才の概念は、通常の尺度で測れない創造性として登場した。つまり、天才の登場は、その他大勢の能力を統一的に測る発想と矛盾することなく、いずれをも普遍的なものとした。この流れは19世紀を通じて進行する。ロシアの世界文学『罪と罰』(1866年)では、平凡な人々の務めは服従することと、生殖して材料としての価値を生きていくことであり、これに対して非凡の人々は法を乗り越えることができるといい、後者の例としてナポレオンが挙げられる。このように考えた主人公ラスコリニコフは天才の行う大きな善の前の小さな罪は許されるという理論の実践として殺人を犯すが、結局はこの大多数人の能力の系列から外れる社会の最底辺にいた女性ソーニャに救われる。非凡を夢見た主人公は殺人の後ではあるが、平凡や非凡という区割りを超越した霊的な高みへ引き上げられる。他方、『コールハース』の主人公は平凡人であること以外何も望んでいなかったにも関わらず、結末では選帝侯の「神聖」を呑み込むことによってナポレオンと同様になる。しかし、コールハースが天才になるのではなく、近代市民としてのナポレオンがコールハースと同じ地平に立ったのではないか。

コールハースの呑む行為を、全く正反対に反啓蒙的な行為として捉えることもできるであろう。

40) Günther Blamberger: "Heinrich von Kleist, Biographie", 2011, S.308.

41) S.9.

42) Günther Blamberger: a.a.O.

43) 谷口健治『バイエルン王国の誕生 ドイツにおける近代国家の形成』「第5章 国家官僚の変貌」山川出版社、2003年

『コールハース』は、啓蒙の先進国フランスによって国土を破壊される中で書かれた。クライストが亡くなるのはナポレオンの敗北がライプチヒで決する前年である。ナポレオンは既に1804年にはローマ教皇をパリに呼びつけ自身が皇帝になり、「神聖」の仲間入りをしてしまった。クライストは、ドイツ人へ祖国戦争を呼びかける『ドイツ人の教理問答』の中でナポレオンを「悪霊」と呼んでいる⁴⁴⁾。啓蒙の磁針は正反対に振れる。コールハースの処刑場に現れた元気な馬2頭はどうであろう。迷信では、悪魔の左足は馬の蹄であり、ゲーテの『ファウスト』のメフィストフェレスも近代の悪魔を自負しつつ、片足を用心深く隠している⁴⁵⁾。コールハースの馬はドレスデンの広場に現れたときも既に怪しかったのだが、処刑場に登場してさらに非現実の空間へ霞んでいく。この場面は人間と動物との分離を遂げる啓蒙主義にはそぐわない。そしてコールハースが老婆の答の書きつけられた紙片を呑むという行為も反啓蒙的である。言葉を発し、肉体から切り離し、音を文字化し、抽象概念を作って論理の世界へ導く啓蒙主義の言語活動と正反対に、言葉を「呑む」とは、言葉を体に戻すことである。古い「神聖」を呑んで新たに「神聖」となったナポレオンに対しては、悪霊退治の反啓蒙の空間が成立する。中世が取り返しようもなく終わっているという認識に近代が必ずしもつながるわけではない。近代と中世はいつまでもお互いの尻尾をかむ。

『コールハース』の冒頭で主人公はかつて旅人にとって楽園があったことを回顧している。それは旅人を国家によって管理する代わりに、習俗や宗教を背景として旅人の道中の安全に気を配り世話してくれる人々がいたというぐらゐの意味であろう。他方、啓蒙主義者たちは旅行を知的活動の源泉として重視した⁴⁶⁾。啓蒙主義の旅は迷信を打破する意味を持ち、道中いたるところにあったパワースポット（例えば十字路）が駆逐された。馬を動力とした時代もクライスト死後、10年を経て鉄道時代に入り徐々に終わる⁴⁷⁾。馬を悪魔と見るのではなく、動物愛護の精神から、郵便馬車の定時運行のために馬を酷使する残酷さが訴えられた⁴⁸⁾。それでも、鉄道時代の最初の頃、鉄道運賃は家畜の種類ごとに区別され、動物と人間は並び合って移動している⁴⁹⁾。

ホレルトは現代の観光旅行を移民や難民の旅と並べ、その重複現象を述べている。観光は「市民権」を持つ人々が近代的な契約とインフラのもとに行うものであり⁵⁰⁾、他方、現在、世界に4250万

⁴⁴⁾ Günther Blamberger: S.352.

⁴⁵⁾ Goethe, "Faust Der Tragödie erster Teil", Reclam Bibliothek, 1983, Leipzig, S.84.(V. 2491). 悪魔メフィストフェレスの近代性はファウストの死後にその魂を天使と争奪する際に現れる。メフィストフェレスによれば近代とは死を厳密に定義し、死を正確に測定しなければならない時代である。そこでファウストの死についての迷いが遅れとなって天使に魂を奪われる (V.11630)。

⁴⁶⁾ 18世紀にゲッティンゲン大学で創設された旅行学講座については以下を参照した。"Reisen – Reisehandbücher – Wissenschaft", Uli Kutter, Deutsche Hochschuledition Bd.54, ars una Verlagsgesellschaft, 1996

⁴⁷⁾ ゲーテが孫に贈ったイギリス鉄道模型のおもちゃの写真がドイツ鉄道史の本に収められている。ドイツで鉄道が開通したのは1835年であるが、鉄道熱は20年代からあった。"Die Eisenbahn in Deutschland Von den Anfängen bis zur Gegenwart", hrsg. von Lothar Gall und Manfred Pohl, C.H.Beck, 1999, S.17 ff.

⁴⁸⁾ シヴェルプシュ『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局、1982年

⁴⁹⁾ 1851年のプロイセン鉄道の運賃率として馬車や馬匹の輸送は別建てとして、1等は特に肥大した家畜、2等は中くらいの肥育家畜、3等は小型の4足家畜、4等は犬、ヤギ、ヒツジ、やせた豚、5等は家禽類としてそれぞれの価格が示される。(池田博行『ドイツ鉄道小史』、1978年、92頁)

⁵⁰⁾ Tom Holert, "Fliehkraft" (『遠心力』)、Kiepenheuer & Witsch, 2006.

人いる難民（国内避難民、庇護申請者を含む）は「人権」という概念に頼りながら、余儀ない移動を強いられている⁵¹⁾。けれども、観光は他の種類の旅の跡を追った歴史を持つ。19世紀の移民船はその後、周遊観光に転用され、第二次世界大戦後にヨーロッパで開発された観光地の多くも20世紀の内戦や戦争の際に難民が使用した大規模なキャンプ地の跡地である。そして今日でも結局、様々な目的を持った人々が同じルートをとって、目的地へ向かう。ただ異なるカテゴリーの旅人の接触が用心深く避けられているだけである⁵²⁾。難民はその生存が生理的なレベルからアピールされ保護が訴えられるが、国境管理者にとっては被保護者と犯罪者の境界線にある。難民がいずれかの判定を「待つ」ことには確たる展望はない。今日の観光客を守る「市民権」は近代の啓蒙思想が形成した法の概念である。市民権の保証がない難民の人権は受け身を強いられる。中世以来の「彼の財産または生命を賭そうと欲」した旅人（『ザクセンシュピーゲル』）の運命は今日、国連の条約と各国間の交渉に委ねられているが、コールハーゼや『コールハース』の時代と比べて、同じ地平を動いている人々の出会いは広がったであろうか。

(2) ザクセンとプロイセン

『コールハース』におけるザクセン選帝侯国とブランデンブルク選帝侯国（プロイセン王国）両国の人物はクライストの創作である。貴族の家系は重複するが、2つの国は中世と近代という時代を並行して描くために対比されている。例えばクライストの生きた18世紀においては、出版の中心地だったライプチヒ（ザクセン選帝侯国）は他のいくつかの都市と並んでドイツにおける啓蒙主義の拠点であり⁵³⁾、ザクセン＝ワイマール侯国にはゲーテやシラーを中心とした文学活動があった。いずれが先進国であったか答えることはできないが、プロイセン臣民であり、ザクセンにも滞在したクライストにとって両国の人々には本質的な違いがあるという。

1800年に大学での学問も婚約も中断して旅に出たクライストは婚約者宛にドレスデンから手紙を送り、「山脈の連なりは人間の感情に影響を与えるようです。ここでは感情の哲学者、人間の友、芸術の中でも特に音楽を愛好する人たちに多く出会います」と述べる⁵⁴⁾。これに対して彼の故郷プロイセンについては、「平野の広がりには悟性に働きかけます。ここでは思想家と物知りに出会います」という。そして「僕は山々が適度な密度で集まり、平野があまりに広くないところに生まれたかった。(…)。そうしたら講義室で学びそんじたことも、感じながら学びとることができるだろうから」。そして「ともかく私たち（プロイセン人）よりもザクセン人のほうが文化のレベルが高いのです」と畳み掛ける。プロイセンの啓蒙は文化ではなく野蛮人を生み出すという。

⁵¹⁾ <http://www.unhcr.or.jp> 「2011年統計報告」

⁵²⁾ 前掲書。例として挙げられている観光地は南仏とスペインである。また移動ルートの重複は、アフリカからヨーロッパへ移動する難民（申請者）がスペインやイタリアの観光地を経由していること、またヨーロッパ大都市の空港に一般旅客用の施設以外に亡命申請者などの一時滞在のために広大な施設があることが述べられている。

⁵³⁾ Günter Mühlpfordt „Halle-Leipziger Aufklärer als Lehrer und Anreger Gottfried August Bürgers – Sein Werden und Wirken in der Geisteswelt der Mitteldeutschen Aufklärung“, In „G.A. Bürger und J.W.L.Gleim“, hrsg. von Hans-Joachim Kertscher, Niemeyer, 1996, S.68 ff.

⁵⁴⁾ 1800年9月3日及び4日、ヴィルヘルミーネ・フォン・ツェンゲ宛。S.540-541. 以下の引用も同じ手紙である。

『コールハース』に描かれる啓蒙的なブランデンブルク選帝侯も、実は民衆から遠い。コールハースの妻が不慮の死を遂げたのも、選帝侯に近づきすぎたからという作者の推測があるだけで、コールハースも詳しい事情を確かめるわけでもない（ただし妻は占いの老婆として復活する）。これに対して、「神聖」を生きるザクセン選帝侯のほうは、軽率な性格だからでもあるが、護送中の囚人に面会し、最後は「お忍び」でコールハースの処刑を見守る民衆の中に紛れこむ。「神聖」とは偏在であり、お祓いの儀式にあるように「穢れ」と接触して無傷である。これに対して啓蒙君主は、宗教を経由せずに国民に近いはずであるが、『コールハース』のブランデンブルク選帝侯の周囲は結界のように厳しいガードで固められる。

新興国プロイセンは王国となる前から移民と軍人を国民の主たる成員として国力を蓄えた。その軍事力は、大抵、まずは隣国ザクセンに向けられ、大きな亀裂を生んだ。1756年に始まる7年戦争はプロイセンがザクセンを侵略することで始まる。1806年、ナポレオンと戦争をするためにザクセンとプロイセンは同盟を結ぶもののナポレオンに大敗、ほどなくザクセンのみナポレオンと講和を結び、ナポレオンの傀儡であるライン同盟に加盟し、ザクセン王国に昇格する。このため1813年のライプチヒ近郊で起きた最後の決戦である諸国民戦争でもザクセンは、自領内であるにもかかわらずフランス側についてプロイセン・オーストリア・ロシア・スウェーデンの同盟軍と戦った⁵⁵⁾。次いで、1848年の2月革命に続くドレスデンの革命を鎮圧しに来たのもプロイセン軍だった。そして1866年の普墺戦争でもザクセンはオーストリア側について、プロイセンに大敗する。ただしプロイセンは軍事国というイメージも崇めて、第二次世界大戦後、東・西プロイセン州の領土を失い、地名も消滅する⁵⁶⁾。

2001年、ベルリンとブランデンブルク州はプロイセン王国誕生300年を記念して様々な展示会、イベントを華やかに開催した。第二次世界大戦と東西冷戦の記憶に覆われたベルリンとポツダムにやっと歴史を楽しむ日々が訪れた。プロイセンとは何だったのかという問いもにぎやかである⁵⁷⁾。他方、ザクセンとは何かという問いかけを昔のザクセン選帝侯国・王国との関連で聞くことはほとんどない。1989年8月、ライプチヒで広がった「月曜デモ」がベルリンの壁崩壊につながったことは、ライプチヒという都市のテーマとなってもザクセン地域の歴史的な背景のもとに語られることはほとんどない。16世紀のマルティン・ルターによる宗教改革を成功させ、プロテスタント（抵抗者たち）という強力な宗派を生んだ地もザクセンであるが、これも地域のテーマではない。

旧東独地域に共通する現在の課題は経済である⁵⁸⁾。2010年8月にドイツ連邦内務省が国内の6つの経済研究所に委託し、2011年1月に提出されたにもかかわらず、あまりに悲観的な内容だったため2012年2月になるまで公表されなかった報告によれば⁵⁹⁾、旧東独が旧西独の水準に到達するにはまだ40年ぐらひはかかるであろうとのことである。この報告を取りまとめたブルーム氏によれば東

⁵⁵⁾ 同地に1913年に建立された巨大な戦争記念碑の正面に立つのは大天使ミヒャエルである。

⁵⁶⁾ カントがいたケーニヒスベルク周辺はソ連領、残りの東・西プロイセンはポーランド領となった。

⁵⁷⁾ “Der Spiegel”, Nr. 4. 2001年1月22日号、特集「血と鉄の国」

⁵⁸⁾ ドイツの州別国内総生産については“Deutschland in Zahlen 2013“, S.121.

⁵⁹⁾ 「ドイツ・ラジオ」、2012年5月16日、「州別レポート」<http://aufdeutsch.news.coocan.jp/383.pdf>

における「灯台」は、ザクセン州の州都ドレスデンと商業都市ライプチヒ、チューリンゲン州のイエナだという。しかし、ここで「灯台」と言われているように、ザクセン州全体ではなくドレスデン・ライプチヒの2都市が光彩を放っているのである。

このように、表面的には、プロイセンのように地域の歴史が現代史と結び付いて取り上げられることがあまりなく、都会か地方かという区別が目立つ今日のザクセン州にも、コールハーゼ=コールハースの生きた私闘の時代を思わせる話題があった。『コールハース』の騎士が逃亡に使い、クライストがその溪谷を旅したムルデ川に面した古城コルディッツが観光スポットとして話題となったのである⁶⁰⁾。岩盤の厚い脱出困難な要塞として、第二次世界大戦中（1941-45年）、ここにイギリス・フランス・ベルギー・オランダ・ポーランドの将校用に戦争捕虜収容所がおかれていた。戦争捕虜取扱いについてのジュネーブ条約（1929年）によって働く必要のなかった将校たち1500人が逃亡を300件以上試み、そのうち31件が成功したという。東独時代には病院として使用されていたが、イギリスでは脱出劇が映画化され、忘れられなかった。ドイツ統一後、州の文化財として1996年から修復が始まり、現在も作業は続いているが、2007年ユースホステルを開業し、ガイドが捕虜収容所の時代を含む城の歴史を紹介している。戦争中、収容所は規則を守って、一旦逃亡が成功した捕虜には、城に残された所持品を返送したという。

⁶⁰⁾「ドイツ・ラジオ」、2012年2月18日、「州別レポート」<http://aufdeutsch.news.coocan.jp/376.pdf>

Kleist's "Michael Kohlhaas" : eine Reise ins nächste Land

Setsuko Ichida-KAKIMOTO

In Kleist's "Michael Kohlhaas" geht es um ein Unrecht, das einem Pferdehändler namens Kohlhaas um die Mitte des 16. Jahrhunderts auf der Reise nach Leipzig an der Grenze zwischen Brandenburg und Sachsen geschieht. In dieser Novelle stehen sich das Mittelalter, von dem die Novelle handelt, und die Zeit, in der Kleist lebte, als moderne deutsche Staaten entstanden, gegenüber. Ein anderer Kontrast ist derjenige zwischen Brandenburg, aus dem Kohlhaas kommt, und Sachsen, seinem Reiseziel. In Sachsen herrscht noch das Mittelalter, in Brandenburg keimt jedoch schon die Aufklärung, so dass hier auch mittelalterliches Reisen, bei dem Gastgeber und Gast standesmäßig Nehmen und Geben vereinbaren mussten, mit dem auf Kontrolle basierenden modernen Reisen kontrastiert.

Durch Vermittlung von Martin Luther gibt Sachsens Regierung Kohlhaas freies Geleit, bricht jedoch schließlich ihr Wort, nimmt ihn gefangen und verurteilt ihn zum Tode auf entsetzliche Weise. Brandenburgs Regierung bringt ihn in die Heimat zurück, erkennt ihm Schadenersatz für erlittenes Unrecht durch den Ritter zu, verurteilt ihn dennoch auch zum Tode durch das Schwert, auch wenn das ein milderes Urteil ist als das in Sachsen. Kohlhaas gibt sich mit dem aufgeklärten Urteil durch das Brandenburger Gericht zufrieden, rächt sich aber kurz vor der Vollstreckung seines Todesurteils doch noch auf subtile Weise an Sachsens Kurfürsten. Es sieht so aus, als ginge Kohlhaas zurück ins Mittelalter, in dem sich seine verwunschene Seele allgegenwärtig bewegen kann.

In der modernen Welt reist man als Tourist mit den Rechten als Staatsbürger und geschützt durch internationale Verträge. Aber es gibt auch heute erzwungene und halb erzwungene Reisen, z.B. von Flüchtlingen und Auswanderern, im Schutz der Menschenrechte und internationaler Vereinbarungen. Touristen und unfreiwillig Reisende begegnen sich kaum, während in "Michael Kohlhaas" unfreie und freie Reisende wie Kohlhaas, der als Gefangener nach Brandenburg gebracht wird, und der Kurfürst, der auf der Jagd mit seinem Hof unterwegs ist, sich begegnen. Dass ihre Wege sich kreuzen, war damals eher möglich, weil es damals wichtiger war, aus welchem Grund man unterwegs war, und mehr tat, um die geplante Reise zu ermöglichen.

